

50 m 潜水実録

小 儀 政 幸

これは私が伊根町主催の潜水土講習会に助手格で参加した際に経験した記録である。

天気は曇っており、連日雨模様だったので良いコンディションではないが、12時45分頃船は11人を乗せて伊根町魚協前を出発した。皆風食を済ませてスーツを着け用意は完全だ、その間にもマスクを洗う者や水深計を検べたり、ポンベの空気圧をはかっている。また潜水順序等を講師の増田氏を中心となって用意に余念のない様準備を行なっている。船は南に向け進んでいたが青島を右に見てから東の方に進みだした。出発してから10分ぐらいたった頃鷺岬が見え出したがその岬より100m程沖より南東の方向に黒い小さなものが点々と連なっている。あれが大敷の垣網の先だと増田氏が教えてくれたが、その先をたどっていくとおどり場らしく黒い点があたり一面に浮んでいる。そうしている間に船はどんどん進み、もう大敷の中に入り込みさっきの黒い小さな点が直径30cmぐらいのガラス製の浮子であることが解った。大敷の中は網と浮子がいっぱいあり、どれが垣でどれがおどりが解らなくなるが、皆んなには解っているらしく適当な所で停った。打ち合わせでは落し網の横のおどり場に入る事になっているが、船は落しの近くにいるのであろう。近くに小さな目の網があたり一面張ってある。出発してから15分ぐらいであった。それから皆んなポンベにレギュレーターを取り付けだした。一度つけてから完全に調子が良いか数回吸い込んで調子を見ている。何しろ何m潜るかは解らないが30m以上は潜るのだ、空気の味まで慎重に調べている。レギュレーターは完全であるか等、アクアラング潜水にはレギュレーターと空気量と空気の質が完全でなければ生命に影響する為皆んな真剣だ。今日潜水するのは皆んな経験を有し潜水土の免状を持っている者がほとんどで6名だ。その名は講師の増田氏、年をとってはいるが潜水は大好きな大西氏、本庄浜で旅館をやっているという森下氏役場で働いているインテリな八木氏、及び魚協の古板氏に私の6名である。

船中の他の5名は初級講習も一応済み船上から見学又はスキンドайビングを行なう事にする。皆んなは直ぐにマスクを洗いポンペを装着して次々に飛び込む。私も足ヒレや手袋をつけ、皆んなに続いて飛び込むが、上から立ち上がって飛び込んだら足ヒレが脱げそうになった。後で解ったのだがその足ヒレは底が破れており危いところで落としてしまうところであった。海面にあがって見ると皆んなはもうおどり場に入っている様である。私も急いで追いかけたが追いかけながら下を見ると落し網が目の荒い切れの様に続いていたが海面には、直径3cm程のロープがあたり一面に張っており、それを乗り越えたり、下をくぐったりして皆んなの後を追った。そこから皆んな潜り込むのであろう網につかまったり、ガラス製の浮子につかまったりしている。増田氏の説明があり、皆んな同じ所で潜るのだけれど一応2人ずつバートを組みお互いを見ながら潜水する事にする。合図はナイフの柄でポンペをたたくからたえず注意する様にとの事だ。私は増田氏とバートを組む事になった。下は何mあるのだろう。よく空の表現に紺碧の空と言われているがそれとまったく同じ様な色をしている。表面は少し濁っておりあまり澄み切ったとは言えないがまだまじな色であった

私と増田氏がカメラを持っており、潜水の合図と同時にカメラを手に持ち潜り始めた。今日は曇っており水も少し濁っているのでサクラカラーN100のフィルムでもすこし無理なようだ。皆んな動いており私も動いている。この調子だとシャッタースピードは絶対1/60を割ってはいけない。そうすれば絞りは4~2.5の間だ。またビントもはっきりしなければいけない……などと考えながら、写しながら潜っていった。

10m・・・15mこのあたりまでは常のペースで下向きに潜るがこの頃より身体を立てて写真を写す。足ヒレで上に向かってこがなければ身体は下の方へ落ちて行った。今日は深く潜る為ウエイトを1kg軽くしておいたのに20m深頃から足ヒレで上の方へ軽くこいでも下の方へ落ちて行った。皆んなお互いの顔を見合わせながら序々に下りて行く。近くにロープが1本あり、3人程つかまっていたので私もカメラをいらうのを止めロープを持った。そうすると増田氏を除いて全員がつかまった。見るとロープに付着した海草が赤色をしており、ポンペの黄色がうつすらと見えるではないか。普通15m以上の深さでは黄色、赤色は消えてしまうといわれているのにおかしいなと思った。

そうこうしているうちに30 mを越え35 mになった。その時カンカンと金属音がしたので止まれの合図だろうと思い止まると全員止まっていた。

増田氏が35の指信号を出して、それからOKの合図をしたので皆んなOKの合図を返した。皆んな異常が無いので又下に向かう合図をして序々に下りはじめた。これから深くへは今まで行った事が無かったので一握り一握り(?)が新記録だ!。一握りというのはロープにつかまって握っている手を離せば身体は下に落ちて行き、1 mぐらい落ちてはロープを握る為である。もう耳抜きなんてめったにしない、耳に感じるのが普通5 mの差であるならば30 m以上なら6~8 mの差だからだ。そんな事よりも今はもう自分が何m行くかが気になり、他人の事、あるいはカメラの事など気にしなくなってきた。深く行けば行く程考えが鈍くなるというのはこんな事だろうか。何回ロープを握っては離したのだろうか、ふと深度計を見るともう50 mを越えている。よく見ると51~52 mのあたりだ。

その時大西氏がクルクルバーの合図をやっている。この合図は潜る前に打ち合せておいたのだが、潜水している間に気が変になったり、頭が痛くなった場合にはこの合図をする事になっていた。大西氏は年をとっているので窒素酔いが早くしかも重くかかったのであろう。他の人々とは見ると森下氏が上の方へ昇って行く。彼が急に昇りだしたのは後で聞くとレギュレーターの調子が悪く空気が急に出にくくなったためだとの事だ。レギュの始末が悪く、誰かが空気室に水を入れたのだろう。大西はやはり窒素酔いだったそうで、後で聞くと15 mぐらいから気分が正常になったとの事だった。

2人も異常者を出したので増田氏はナイフをボンベにあててカンカンという音を立てて上に行く合図をした。5 m程行ったら増田氏が停れという合図をしそれから序々に上れの合図をしたのだが、そこにいる我々(古板、八木、小饒)にはそこにじっとしておれの合図か、上へ昇れの合図か、解らずとりあえずじっとしている事にした。だから我々3人は45 mぐらいの所でじっとしていたし、増田氏と大西、森下の3人は上の方へ消えて行き、2つに分離してしまった。空気は吸い込むと一度にどっと入ってくるので小口に吸い込んではいきさみに出す事にした。少しでも余分に空気を使わない様にしたのだが、これはあまり良い結果が出ず船に上って20分程してからもう一度8~10 mの深さを

10分間程潜ると少し頭が重くなった。やはり大きく吸い大きく出すべきだった。3人が上の方へ消えてから周りを見わたすと、おどり場の網は直ぐ後ろにあり、ずっと向こうの方にも薄くぼんやりと網らしきものが見える。水の透明度は25~30m程もあろうか上よりも下の方が良く見えるのも、又こんなに良く澄んでいる海を見るのも珍らしい。紺色の中に視界は消えていた。また底の方もまだまだあるらしかった。紺碧の色がやはり視界をさえぎっていた。後で聞いた話しだが70m強もの深さだそうだ。約20mの差もあれば底は暗いのだからこんなものなのだろう。次に温度計を見たら水温は21.5度であり、表面の水温が23度だったので1.5度の差だ。1.5度の差ではあまり差が無いほうである。其の様な事をしている間にいろいろするのがじやまになり、せっかくの良いチャンスであるのに写真を写さず私はボーとしていた。どうやら私も窒素酔いを経験したらしい。なんだか体がフラフラしてローブにつかまっていなければ安定を保てないような気分であった。

そこに停ってから5~6分たった時である。カンカンという音がして来た。これはきっと浮上の合図であろうと我々は顔を見合わせて上の方へ行き出した。なにしろ45m程の所で5~6分いたのだ、我々が3人常に目の前に相手がいるにしても孤独感というか異様な状態の中にいる為の恐怖感というか解らないが、それを取り去ってくれるものは大気の中への帰還である。もしその合図がちがったものであるにせよ上へ昇れば安心が待っている。そう思えば上昇の事以外は思考の中から消えていた。しかしすぐに唐田氏が上から降りて来て上昇の合図をし、我々は毎分10mの線を守りながら序々に上りはじめた。上へ昇る方が下へ潜るよりも危険の唐合が大きいので、エンボの心配をして写真を撮ったり、マスクブローを行ったりしてのぼってきた。40 から30、20、10 このあたりまでは気が楽だが、これよりもっと慎重にスピードを落とす。特に3m附近では横に遊泳して急にあがる事を避けた。ベンドの心配をしたのだが12ℓの130気圧なら1本まではまず安心なので気楽だ。いよいよ水面に出た、そこには森下氏や大西氏も他の皆んなも待っていた。大気の味はうまかった。やはりコンプレッサーで入れた空気より、ふんだんにある空気の方がうまい。今まで吸っていた空気とは異なる言いようのない味であった。

船上にあがり装具を取ると時間を見た。潜水時間は約20分であった。ボン

べの残圧が65気圧なので780ℓの空気を使った事になる。毎分43ℓ強使っていた事になる計算だが、深さが平均40mとすると1分間1気圧で10ℓも使わない勘定になり、これでは頭が重たくなるのも当然だった。

今度からはもっと空気をふんだんに使ってやろう！ 但し潜水時間に若干の誤りがあるかもしれない。

